

夜昼寝起きしているうちに

津守 真

ことしも、私共の養護学校は五人の卒業生を地域の養護学校の中等部に送り出した。子どもによつては二、三歳のときから来ているから、小学部六年生を卒業するまでに十年間も通ってきたことになる。幼児のころには、さががどうなるか見当がつかなかった子どもたちが、この頃になるとそれなりに落ち着きができてゐる。私はひとりひとりの子どものこの年月のことを思い浮かべながら、イエスの「成長する種のたとえ」を引いて卒業式のはなしをした。それは次の箇所である。

「神の国は次のようなものである。人が土に種をまいて、夜昼寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。土はひとりでに実を結ばせるのであり……」（マルコ、四章）

七、八年前、どの子どもも大変な時期を過ごしていた。発作のひどかったある子どもは、夜泣きしない日はなく、ひるまも機嫌悪くむずかり、自分の手をかみ、どう過ごして

よいか分からなかった。大声を出すので、家でもまわりの人たちにきがねして、しかも母親のやり方がわるいと皆から非難されていた。そのころは学校でも、どうやっても機嫌がなおらないことがしばしばだった。

ある子どもは職員の肩の上のって一日中を過ごし、笑うことをしなかった。ある時期にはくる日もくる日も、水ばかりやっていた。遠くから通ってくるのに、水遊びをしにくるだけで申し訳なく思った時もあった。一日中おんぶして過ごしてそれでいいのかと疑問に思った時期もあった。いつのまにか、その子どもはいつもにこにこ笑顔で、だれからも可愛がられる貴公子になっていた。

こういう日々を、夜昼寝起きして過ごすうちに、種は芽を出して成長した。

成長とは、大人に具合がいいように変化することをいうのではない。その子自身が、自分から何かをするようになり、自分で遊べるようになり、自分の人生を自分らしく形成するようになることである。

それには、家庭と学校とが一緒になって、そのたいへんな日々をもちこたえ、子どもが自分で何かをやったと思える毎日をつくり出し、大人も何かを子どもと一緒にやったと思える日を生き、そうやって過ごしてきた。

このあいだ、毎月の懇談会るとき、今度卒業するひとりの子どもの母親がこんなことを

話した。以前はこの学校の卒業のときがきたらどうしようとおそれていたが、いまはこわくない。子どもと一緒に毎日をつくってゆける自信があるというのである。私はこのことをうれしく思った。私共の学校は小学部までしかない。とくに障害をもった子どもと親にとっては将来は重くのしかかっている。障害者を仲間にいれてくれないこの社会では、ことにそうである。このことを承知しながら、また具体的にはわからないことばかりなのに、この子どもと一緒に、他の人たちを含めて、毎日の生活を明るくつくってゆける自信があるという。

発作をもった子どもの発作がよくなったとはかならずしも云えない。学校は発作を治すことはできないかもしれない。しかし、学校は、子どもが発作を起こしながらも、自分で生活する場をつくることはできる。その子どもは、あるとき、発作を起こしたあと、いま頭の内部で起こった奇妙なことは何だったのかというように、自分の頭を壁にぶつけてためていた。むずかるときには身体を支えるだけで大変なこの子どもと毎日をつき合っている職員や実習生との日々がなければ、発作を起こしている自分を意識するほどに、この子の自我は育たなかったらと思う。その毎日の中にたいせつなものがある。卒業式にあたって、私はこういう趣旨のことを話した。

「夜昼寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、そ

の人は知らない。」あとになってみると、能力は伸び、落ち着きもでき、生活もらくにな
って成長していることが認識される。しかし、そうなるまでの毎日の生活の中では、成長
は目に見えない。

夜になると寝て、朝起きるというだけで、子どもによっては大変である。そして、昼間
の時間を毎日どう過ごすか。「夜昼寝起きしているうちに」という一行の中に、何と多く
のことが含まれていることか。その毎日を、子どもを育てる大人自身がどう過ごすのか。
日々私共に問われている。

(愛育養護学校)

